

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

善導教義における信の確立

氏 名

近藤法雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、初唐の長安において、中国浄土教に独自な世界を築いた善導について、善導の5部9巻の著作に説かれる往生行を比較検討する中で、その教義における信の確立を得るまでの軌跡を追っていくものである。

まず著作について、最初に『観念法門』、次に『往生礼讃』、続いて『法事讃』が成立し、最後に『観経疏』と『般舟讃』がほぼ同時期に成立しているという仮説のもとで、その成立順に本論文の章立てをおこなった。

また、善導は有名な宗教家として長安の各所で布教に精励したが、実は善導自身が求道者として、自己への厳しい内省によって、自身のための法と行をひたすら学び求める生活を続けたのである。したがって、善導の著作は、あくまでも善導自身の求道の記録であるという視点から、その内容を詳細に分析するという方法をとった。

第1章では、『観念法門』を3段に分け、念仏のもつ意味について調べた。第3段における念仏は、すべて仏を憶念するという心的な意味を表し、念仏と称名とははっきりと区別されていた。しかし、第1段と第2段では、念仏と称名の区別は曖昧になりかけていて、特に第2段は師である道綽からの影響を十分に受け、念仏と称名とを結び付ける傾向があった。

第3段が最も古い時期に著され、続いて第1段、第2段と著され、最後に1巻にまとめられたと考えられる。この第2段の称名念仏による浄土往生の思想は、『観念法門』以降の著作に発展していくもので、『観念法門』が善導教義の出発点となるものであることが明らかになった。

第2章では、『観念法門』の思想をうけた『往生礼讃』について考察した。『往生礼讃』においては、曇鸞から伝えられた五念門の行体系に対する善導独自の解釈がなされていて、作願門と観察門との順序が入れ替えられ、五念門行に三心を符合させ、行の裏付けとなる信心が重視されている。そして『文殊般若経』に説かれる一行三昧の解

釈から、凡夫にとって実践可能な称名の易行性が浮き彫りにされていることが注目される。

称名念仏を強調することには、阿弥陀仏の本願の支えがあるからこそ称名念仏の易行による往生が可能であるという善導の確信があったと考えられる。善導自身の凡夫であるという自覚と本願の支えがあるという認識（二種深信）こそが、善導の求道生活における希望であり、この『往生礼讃』に見られる深信の知的性格が、次の称名中心の五正行体系を生み出す足がかりであったと推測される。

第3章では『法事讃』に記された善導自身の実際の儀礼の内容について考察した。その結果、そこには民衆本位の儀礼となる工夫が施されていることを確認した。また『法事讃』においては、称名と『阿弥陀経』の読誦が強調され、五念門行と五正行が並べて説かれ、五念門から五正行への移行の中間の段階にあることが明らかになった。

さらには、阿弥陀仏への絶対の帰依と浄土往生の強い確信から生まれる深いよろこびの表現が注目された。善導の伝記資料からは、厳しい実践の生涯であったことが窺われるが、その根底には確立された信心の裏付けがあり、その確かな信心を得たことが大きなよろこびを生み出したと考えられる。

第4章では『観経疏』をとり上げた。『観経疏』において、善導は『観経』に説かれる三心を最重要視して教義の中心に据え、その教えに対する信の確立のために、信に裏付けられた五正行の体系を打ち立てている。

善導は五正行を正定業と助業に区分しているが、本論文ではそれに関連して、行体系の裏付けとなる信心に注目した。善導自身の心の底には、三心は行の裏付けとして絶えず具わるべきであるという強い信念があり、そのため行体系の中に三心すべての確立を図ったこと、そしてその苦慮の結果が五正行という形と正助の区分に表れていることを指摘した。

最後の第5章では『般舟讃』をとりあげた。善導は五正行の実践を重ねることで、懺悔しても懺悔し切れない自己の真実に気づき、その自分でも救済してくれる本願力への讃嘆の気持ちが『般舟讃』で端的に表明されたと考えられる。

それまでの善導の厳しい懺悔の実践の中で、懺悔し切れないという自己の真実への気づきによって、「真心徹到」という真実に徹する心が重視された。その中には、阿弥陀仏の本願力による救済への真実への気づきも含まれ、それらは「信知」と表現され、教義の根幹である深信と称名に繋がっていたと考えられる。

以上の5章にわたって善導の著作は『観念法門』→『往生礼讃』→『法事讃』→『観経疏』・『般舟讃』の順で成立したという仮説のもとに、善導の実際の足跡とも照合しつつ検証をしていった。その結果、求道の道のりの先にある善導の目標は、信の確立を得るために、凡夫である自己に相応しい行を探ることであった。5部9巻の著作をもって、それは称名の一行であると確信できたのである。